

# 太 棹

昭和十六年三月廿八日  
第三種郵便物認可

昭和十七年十二月廿三日 印刷納本  
昭和十七年十二月廿五日 發行

(每月一回)  
廿五日發行

太棹 (第四百十號)



長草

第四百十號

文樂座出勤の  
鶴澤觀西翁



七十九歳の高齡を以て元氣益々旺盛の鶴澤觀西翁は、大阪文樂座の十月興行より出勤する事になりましたが、師が五十餘年前野澤八兵衛と名乗って文樂座に出勤中、今の曹竹古靱太夫が十三才の時初めて大阪に出て法善寺の津太夫に入門した時の事「聲柄もよく中々語る子供だから、三味線を弾いて貰いたい」との法善寺の話に當時數度弾いて、古靱太夫も子供ながら頗る評判がよく人氣を博したものださうです、その古靱太夫は今も樞下となつて五十餘年振りで顔をはせるなど随分古い話でもあり、亦奇縁ではありませんか。  
(本誌一三八號より再録)  
觀西翁は今月も引き続き文樂座引越興行の演舞場に出勤中であります

鐵道省指定  
頭等旅行社

元水浜 西村録司

別府觀海寺 電話五〇、八三八

書乃并館

風流・金ぶら・茶漬  
(美地句)

去月屋

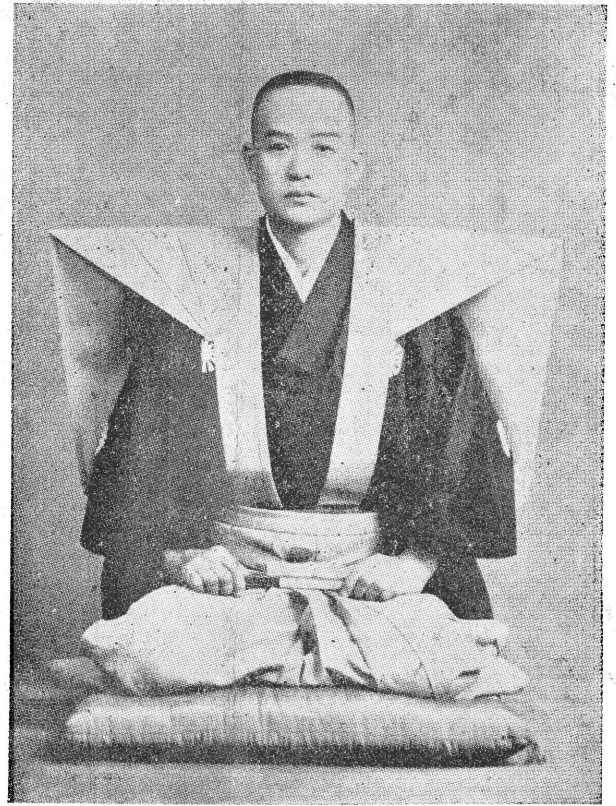
新橋二ノ八  
電銀二〇八

席貸

並木俱樂部

淺草・雷門  
電話淺草一二三五番

野澤勝平改め  
二代目野澤喜左衛門



略歴

文樂座三味線の重鎮野澤勝平は二代目野澤喜左衛門を襲名し、大阪文樂座十一月興行でその披露を致しました。

明治二十四年六月廿七日神戸市楠町ニ産ル。本名加藤善一、三代野澤勝市(後ノ初代野澤喜左衛門)ニ就キ、八歳ヨリ太夫トシテノ教ヲ受ケシガ、十歳ヨリ三絃ニ轉ジ卅三年十二月因講へ加入ス。同卅七年十二月、二代鶴澤寛治郎ノ膝下ニ教養ヲ受ケ、翌卅八年一月ヨリ三代竹本越路太夫一座ニ加ハリ寛治郎師ニ隨行、東京市ヲ振出しニ約一年七ヶ月ニ涉リ日本全國ヲ巡業ス。明治卅九年九月ヨリ御靈文樂座ニ入座シ、此時ヨリ番附ニ載ル。大正八年九月興行ヨリ本澤ニ昇ル。同十二年十一月、京都文樂座創立ヨリ七代目竹本八十太夫(今ノ六代竹本佳太夫)ノ相三味線トナル。昭和十一年一月、新義座組織サレシニヨリ同座ニ加盟全國ヲ巡業ス、同十四年六月、同座解散迄行ヲ俱ニス。昭和十六年一月興行ヨリ文樂座へ復歸シ、同年九月興行ヨリ三代竹本伊達太夫ノ相三味線トナリ今日ニ至ル。

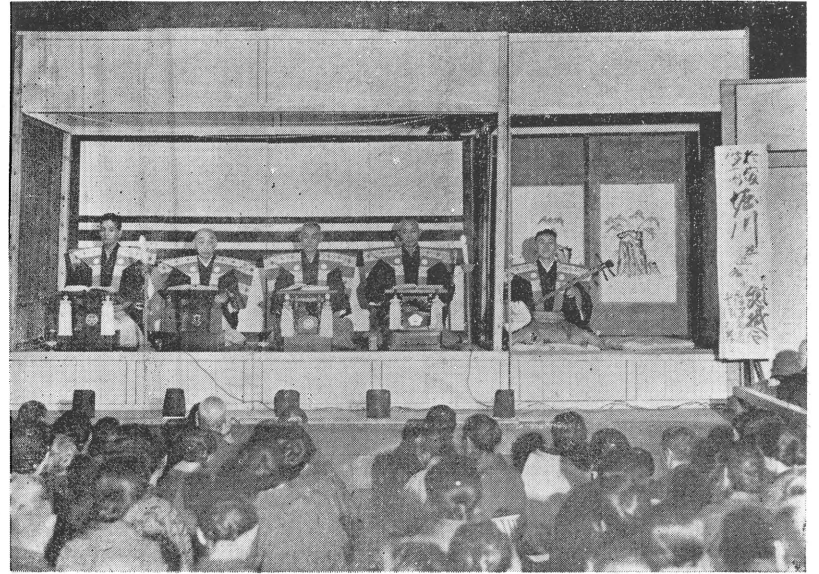
高山・阿部兩家の慶事



高山太一氏長男雅雄氏(卅才)は阿部吉之助氏長女和子さん(十九才)と十一月三日の佳節をトシて上野精養軒に於て芽出度華燭の典を擧げられました。雅雄氏は明大薬學科専門の秀才、和子さんは今春京華高女卒業の才媛で、又新郎の母堂は和子、新婦の尊父は一と號し、兩氏とも豊竹巴雪連の錚々たる語り手であります。

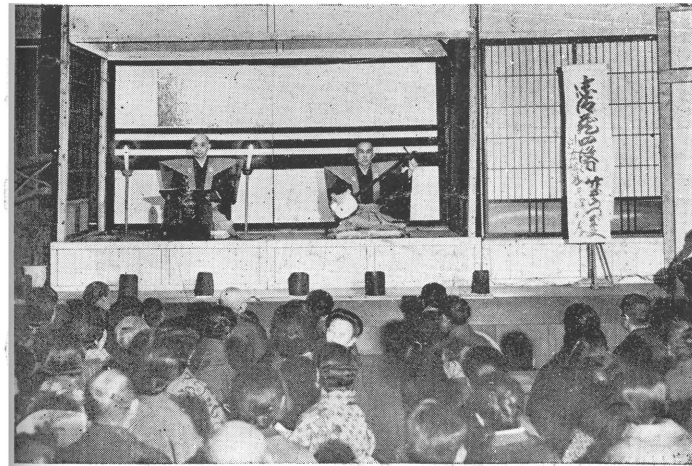
(本誌記事参照)

# 新瀉第一劇場に於ける正義座



(前號記事参照)

向島墨聲會有志を以て組織された正義座は十月上旬新瀉市第一劇場に於て二日間開演、大盛況非常な好評を博しました。寫眞(上)大切堀川の掛合與次郎、八雲大夫、枯梗(母)益太夫(辰和加)お俊、うつぼ(うつぼ)傳兵衛、國大夫(義昇)の諸氏に絃は龜造。寫眞の下は忠回を語るうつぼ氏。絃(和孝)



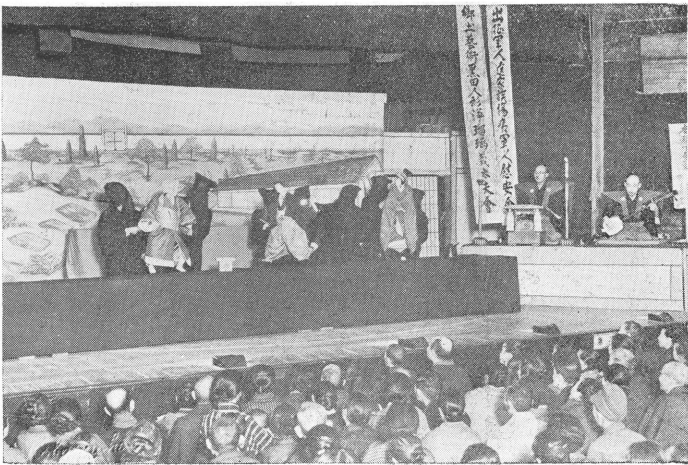
## 出征軍人遺家族傷痍軍人 慰安人形淨瑠璃會

長野市權堂町相生座にて(十月十・十一日)

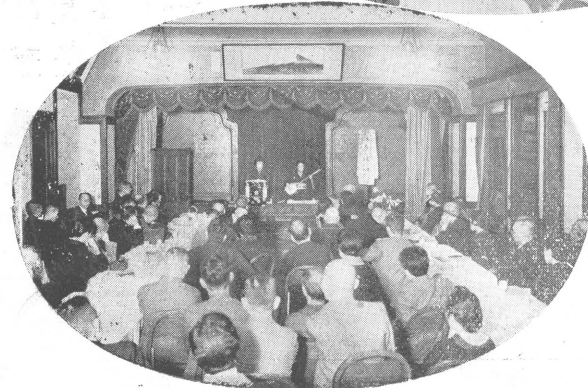
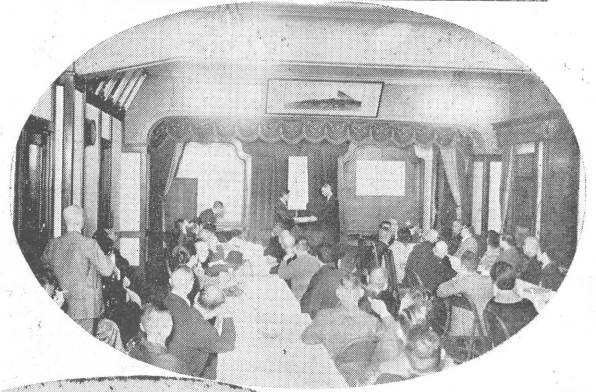
主催 大日本婦人會長野市支部  
出演 長野親豐會  
人形 黒田人形(下伊那・黒田)



寫眞(上)出演者記念撮影。寫眞の下は本下を語る田中和國氏(絃、團豊、尺八、竹童)  
(本號記事参照)



念記回拾五第會究研曲淨支素



寫眞(上)出席者記念。中は岡田氏への表彰。下は「河庄」を語る豊竹團司と絃の豊澤小住。(本號記事参照)



太 棹 第四百十號 目次

表紙・カッツト……………齋藤清二郎

口 文樂座出勤の鶴澤觀西翁・二代目野澤喜左衛門・新潟劇場に於ける正義座・高山・阿部兩家の慶事 出征遺家族慰安淨瑠璃會・素玄淨曲研究會記念

蟲 聲 滋 々 (二)……………紅雨莊主人 (三)

十一月の文樂座……………西尾福三郎 (六)

文 樂 圖 譜……………宮尾しげを (九)

旅 興 行 氣 分……………山本 荻 舟 (一〇)

古 靱 太 夫 に 望 む……………安 部 豊 (一〇)

批 評 と 活 字……………中 山 泰 昌 (一四)

正 義 座 の 盛 況……………公 孫 樹 (一七)

團司を聴く……………岡田蝶花形(四)

五十義會試演・千晴氏の「忠四」……………内田三千三(一〇)

五 十 義 會 番 附……………(一〇)

會 報 ・ 消 息……………(一一)

太 棹 社 彙 報……………(一五)

濱野若狸・田中湖月・森三好・竹澤龜次郎・濃沼馨



# 蟲聲 滋々 (二)

## 紅雨莊主人

◇「轉化の方則」によつて、「立上り」は「たちあがり」と云つてはいけぬ、「たちやがり」が正しい、といふ奇論が東都の一角に出現してゐる。出現だけならよいが、やがては實行に移されやうから油断はならぬ。

◇その論據は、「タ」行の音に「ア」の母音が續く時には、「ヤ」と轉化すると云ふにあるやうである。成程轉化する時には「ヤ」と轉化して、「立まがり」だの「立わがり」だのとは言はぬであらうが、轉化せねばならぬと云ふ理屈はどこにもありさうにない。「場合」は「ばやい」と發音しても「場あたり」は「ばやたり」とは云はぬ。男と女とが出會つたら必ず夫婦になるとは限らず、人と結核菌とが出會つたら必ず肺病になるとは極まらぬのである。

◇「立あがり」といふ言葉が「立やがり」といふ言葉になると迄は言はぬにしても、音曲上の扱として、「御有様」を「おんなりさま」といふやうに。「立あがり」とギツクリ云はずに、

されるかと云ふ數の関係其他で極まる。或言葉が轉化するか否かは其言葉によつて違ひ、或言葉は轉化して他の言葉は轉化せぬのは、熟度如何の関係であり、熟するか否かは瀬用度アクセント、前後の音等できまる。何行と何母音と續いたら必ず何に轉化するなど、云ふ事はあり得ない。轉化する事もあればせぬ事もあり、轉化する場合にこうなる、外のやうには減多にならぬ、といふのが所謂轉化の方則である。

◇轉化する場合でも、必ずしも原音が誤りであると斷する譯に行かぬ。新村出博士の「辭苑」には「ばあい」「しあわせ」は有つても「ばやい」「しやわせ」は無く、「ばあい」「しあわせ」の項に「や」と發音する場合のある事すら書いて無い。六かしく云ふと言(Tunguso)と言語(Speech)といふやうな點に話が觸れて話がくどくなるが、要するに「しあわせ」は誤りである。「しやわせ」が正しい。「ばあい」は誤りであつて「ばやい」でなければならぬ、とまで云ひ切れるものではなく、寧ろ「しあわせ」「ばあい」といふのが本當の言葉であるが、轉化して「しやわせ」「ばやい」と發音するを普通とする、位に考へて然るべきものと思はれる。場合、仕合せさへ尙ほ且つ然り、況や「立ちやがり」に於てをや。

◇第一ケツクイぢやないか。

◇「七」の支那音は北も南も「チー」であると前回述べたが、

「や掛つた」言ひ方をするといふ事は考へ得られる。その場合には「ア」から「ヤ」迄の無數の階段が有る筈で、場所々々によつて適當に云ひわけける事になる。はつきり「あ」でいけないうなら、はつきり「や」でもいけぬので、其調子でやつては「御歌」が「御スタ」になつて一杯やりたくならぬ。

◇一體轉化といふのは、物をはつきり聞こえさうとか、美しく言はうとか、簡単に言はうとか云ふやうな心理的必然と成るべく骨の折れぬやうに言はうとする生理的必然とが組み合つて生ずるので、「場あい」では明瞭を欠ぐし、はつきり「バ、ア、イ」と云ふのは骨が折れるやら、Yといふ所謂「涉り音」を入れて「ばやい」と發音し、それが「濶用」の結果「熟して」「ばやい」といふ言葉になつた。同じ理屈でWを涉り音にした「ばわい」も音聲學上では認められて居り、現にさう發音する地方もある。たゞ「ばやい」と「ばわい」と何れを標準音と認めるかは、何れが「社會的に」是認

其後或席た若い篤學の國民學校の先生から、此文字の輸入された當時の發音は「シ。」といふ促音であつたと教はつた。支那自身年代と共に發音が變化して居る譯で、同時にこれが字引に「七」を「シチ」と書いてある理由でもあらう、此事は併し前回の所論を覆す事にはならず、寧ろ補強する事になりさうに思はれる。何とならば「七」の「字音」はシチであるとしても、字音通り發音せねばならぬものなら、王子はウジと云ひ、甲府はカフフと云はねばならず、下十條がシモジフデウ、「じふ」、「じう」、「じゆう」や、「けう」、「けふ」、「きやう」も區別せねばならず、アレてふてふ(蝶々)が飛んでゐるなどゝなるが、一々そんなに發音する人もなく、せねばならぬとする人もない斗りか、字音假名遣自身が廢止されんとしてをる。廢止がよいか悪いかは別として、とにかくそれが案になるやうな状態に在る。

◇シチがテフテフと異なる所は、シチは現に云はれて居る地方があるといふ事であり、其地方が東京と云ふ政治上文化上重要な地方を含んで居り、數から云つてもざつと日本人の半分位に上るといふ點である。そこから正音だとか訛音だとか云ふ問題が起るので、若しシチと云ふ人が北海道と九州と四國だけだつたら、シチの方が訛音扱されぬとも限らぬと思ふのである。イヤそんな事があるものか、現に字引にシチとあると云つても、字音や字音を保存して居るのがそれ程尊いなら

四國のジとヂ、ズとヅ、クワ、なども尊いので、この尊い筈のものが新假名遣では揚棄（便利な言葉だ）されやうとしてゐる（カイシヤと書いて四國の人はクワイシヤと讀ませるのか、クワイシヤとは今後言はせぬのか、其邊はよく知らぬ）のを以て見ても、其の尊さの程度が分る。

◇一體言葉といふものは、他の森羅萬象と同じく、常に變化するものである。言葉は「言」と「言語」とに分けるとして「言」はわれ／＼の頭にある或物、或思想、或觀念の固まりで之を聲に發して、發表傳達するのが言語である。性質上「言」として頭の中にあるのは過去の言葉であり、「言語」として聲に發するのが現在の言葉である。字引に書いてあるのは主として此「言」であり、其「言」にして餘りに過去になり過ぎたものは死語廢語として除かれ、中位の奴が古語として残り、「字音」なども其程度で、字引といふ倉庫にあるけれども、使はれて居らぬ部分が澤山出來て居る。字引は言葉の墓場であつて源泉ではない。字引を萬能と思ふ人が有つたら此點にお目止められたい。

◇かくて、現在の言葉たる「言語」が變化して行く。人は同じ言語を常に同じやうに發音すると限らず、アクセント、メリハリ、氣分等によつて云ひ方が違ふ。百人千人一億皆同じ發音をせぬ事は申す迄もない。何百年経つうちに變化するのは當り前で、變化せぬのが不思議な位である。

よつて同じでない、と見る事が、言語變化の現階段に於ける素直な見方であらうと思ふ。そして、言葉といふものは、こゝ云ふ風に見るべきものだと思ふのである。

◇以上は淨瑠璃と云ふものを離れての話であるが、淨瑠璃と交渉を持つて考へる時、この問題は更に複雑になる。淨瑠璃は前節に云つたやうに、畿内の言葉と、普通の文章語とをチャンボンに使つた文章を、樂聲と活音とのチャンボンで表現すると云ふ、複雑極まる音曲である。普通の文章を普通に朗讀する時のやうな、シチカヒチカと云ふやうな簡単な命題で近づくべきでなく、況んやヒチは訛音だから改めると云ふやうな指圖を、此藝については局外者である筈の「専門家」から受くべきで無い。「専門家」の説は云はゞ證人や参考人の證言と同じく、一つの資料としてのみ意義と價值とを認めべきで、それをどう採用すべきかは別の問題である。事實、證人や参考人に裁判送せられては困るのである。（一七・九・一六）

前號正誤（誤植のうち分りにくいもの等）

三頁上段二行「轉訛の方則」ハ「轉化の法則」

五頁上段六行「或形の表現」ハ「或形の表現」

同 下段九行「ロにも」を取る

同 十行 HARMONY は Harmony

六頁上段三行「一〇家の節穴」ハ「一〇宛の節穴」

◇今、七といふ言葉は字引の中にはシチといふ昔の字音で残つて居り、又關東地方では其字音のまま残つて居るが、關西では已にヒチに變化して了つて居ると見るべきやうに思ふ。公平冷靜に考へて「一七」に對しては、變化せぬシチと、變化したヒチとが、並び行はれて居るのである。

◇之に對して「ヒチ訛音論」をなす人は、畿内の人はシをよくとに訛る、ヒチもそれであるとす。確かに有力な見方である。併し同時に、關東の人はヒをシに訛る。其爲め、文化の古い畿内では已に己にヒチに變化して居る言葉を、關東では未だにシチと發音して居る、とも云へぬ事は無い。この問題を更に展開すると、關東の發音、ことに母音の出し方の不完全、其結果生ずる子音の不明瞭といふやうな事になつて來るが、とにかく七をシチといふ事は、ヒをシに間違へる關東では容易でも、シをヒに間違へる關西では特別努力の要る不自然な發音である。其關東でも、例へば、「八百屋おシチ」「悪シチ兵衛」「シチ生報國」「第シチ十シチ」「シチシチの賀」などを明瞭に、努力なしに、シチと云つて居るであらうか。恐らくシとヒとの間位ではあるまいか。同時に關西でも、齒の抜けた、頬の落込んだ老人など、屢々ヒチをシチに近く發音するやうである。

◇死物としての過去の言葉でなく、活物としての現在の言葉を問題にする時、七にはシチとヒチとの兩音があり、地方に

### 文樂圖譜解説

(い) 薙刀 鬼一法眼のキリ、五條橋に出くする辨慶の持物、總長さ五尺、柄だけは三尺。

(ろ) 佐々木の槍 槍先九寸、柄三尺五寸六分長さがあるが、下部についてゐる紐が、中途にかけてあるのを外すと、柄が中から一尺二寸バネ仕掛けて下へ出てくる。斜に出てゐる齒は柄の座から二寸の所から出、槍先は銀色

(は) 湯呑 伊賀越の傳授の際、大内記の用ゆる黒塗湯呑、臺高さ二寸七分、茶椀のる所經四寸七分、湯のみ高さ二寸五分。

(に) とつばい兜 挾間合戦七つ目の義龍の被る、忠臣藏大序、鶴岡の兜改めにも流用される、とつばいは銀色の高さ九寸五分、左右九寸、つば三寸五分、紐は紫、内側經五寸。

(ほ) 風車 伊賀越の饅重娘に出る、一尺三寸長さの柄に赤緑黄紫白色の紙の順で、風車は出來てゐる、左右五寸。

(へ) 遠州行燈 この種の形のもの云ひ、時代ものにしてふ、高さは二尺一寸程度である。

(と) 角行燈 多く世話物に用ゆ、丸行燈も世話である。寸法、時代と同じ、座の一角は下部八寸五分、高さ四寸上七寸七分、この上の寸法は頂までのび、二寸七分だけ四本の棒に紙が張られてゐない。



# 文 樂 座

十一月

西尾福三郎

前號で文樂の低調を批難した私は、今月も亦々同一言を繰り返さざるを得ない事を悲しむ者である。が、これ以上を敢て言ふまい。今はたゞ竝べられたものを、ありのままに見聽してゆくより外にこれ以上無益の憎まれ口を叩く氣はしない。

ところで、扱て一番目のお七吉三は八百屋内の段が珍らしいと云ふだけで、その内容に到つてはスカみたいなもので、次の火見櫓の場に文五郎お得意の梯子昇りを見せる爲のプロローグと云つた程度で、元來が切狂言の打出し用に明るく華やかに、そして目出度軽くと云つた工合に膽立てされた二番目物を行きなり、面はりに持つてきたところに妙に嵌らない印象を與へるだけで、その外に何の感想もない。第二は西亭作詞作曲の新作出陣。西亭事野澤吉左改め松之輔、これは

がに間然するところの無い切迫した情愛を充分に描き出してゐたが、何と云つても作品が悪い。同じ卓抜した技巧でも玉を刻むと朽木に刻むとは結果に於て雲泥の差がある。この際一層の自重精進を希望しておく。

第四、十種香と狐火。今回の興味は何と云つてもこの場の絃を受つた觀西翁の出來如何にかゝつてゐる。新左衛門の如く幽艶ではないが、音色の艶は何處となく吉兵衛を思はせ老齡にも拘らず確つかりとしたところ、追がに練磨の功の並々ならぬ節を感じさせた。八重垣姫を受つた南部とは屢々組合せになつた事もある關係でか、イキの合せ方も心得たもので、充分にあしらつて捌いてゐる節々が感じられる。却つて南部の方が堅くなつて上り氣味で一杯に語りすぎた所があり、織の勝頼は品もあり行儀もよく、その他古靱の鎌信に、大隅が白須賀、住が原と云つた御馳走役に顔を竝べてゐる外ツレに寛治郎友衛門まで列座して、近來にない豪華版である。がこれは賣り物の花飾りで、その爲にこの一場の價値がより以上に良くなつたか何うかは自ら別の問題に屬する。

切りは三十三間堂。平太郎住家の切りを大隅が語り、木遣りを源、文と云つたところに新左のタテで以下お芝居の雛段式に、例によつてズラリと正面に並べて賑やか一方の彩末に仕立て、中途半に切上げてしまつてゐる。又何をか言はんやである。音頭の場は全く言語道斷で柳全曲に漂ふ甘美さと

襲名でなく改名で、その披露狂言である。巴御前の出陣を松羽目物に扱つた短篇で可もない不可もない程度のもの。番附面には仙糸も道八も顔を出し乍ら一向に登場しない例のやり口である。

第三が古靱の鳴戸。櫓下が何の理由でかうしたものを取上げるのか私にはその氣持が分らない。先月の油屋と云ひこれと云ひ、斯様な安易なもの許りと取組んでお茶を濁してゐる場合ではない事、百も二百も先刻御承知の筈である。もつと死身になつた一生懸命の作品を提供して櫓下親ら陣頭指揮の眞摯敢闘振りを見せて貰ひたい。勿論この一曲を語りつくした古靱の熱意も技巧に關する限り其處に些かの安易さもあつた譯では決してない。特にお弓とお鶴の親子の眞情描寫には遺

哀愁との渾然とした諧和をこゝに盛つた原作の意圖は無慘なるかな裏切られたのは止むなしとして、氣の毒なのは大隅清二郎の持場で、前の二十四孝も後の木遣も華やかな二場の間に挟まつて、さらでだに陰氣な一と場が一層に暗くジメ／＼したのになつてしまつた。この場の幽氣を語り、そして彈かうとした二人の解釋に一應の諷意を呑むものではないが、今度は非常に部の悪い持場に立たされた點に同情する。

人形は全體を通じてこれと言つた特に傑作はなかつた。文五郎のお七、紋十郎の八垣姫はいつもの通り、榮三の巴御前は珍らしく、十郎兵衛も例によつて手堅いと示ふ程度で殊更ら取立てゝ云ふ程の事もあるまい。

要するに全體的にみて何もかも平凡の一語につきる。

## 補遺

以上が十月興行の大體の印象であるが、引續十一月は、興行物全盛の波に乗つてこゝも御多分に洩れず二ヶ月延長の据置きとあつて、右の内から新作の出陣を渡し、二十四孝は三味線の觀西翁だけをそのままに太夫の顔ぶれを多少變更してこれを切狂言に置き、外に第一に布引の三段目と第三に壺坂と云つた竝べ方で、全體から見て十月よりやゝ見答へのある排列になつてゐる。然し出陣も二十四孝も二度も重ねて戴ける程の代物でないから、かうした部分的な入れ替へ法は氣分一新の點から見て妙にいちましくて感心しない。



其處で古靱は實盛物語の段を受持つてゐる譯であるが、その前に瀬尾十郎詮議の段なるものがあつて、中と次に分け、次の條りを大隅が語つてゐる。尤もその前に更らに御座船の場があつて網造の紋を本位に七五三大夫の實盛一本の外は太夫交代で至極簡單にやつてのけてゐる。大隅の瀬尾はこれは無論佳作である事は豫想された通りである。それに榮三の實盛があく迄動かないでジツクリと受けてゐるに對して玉造の瀬尾が盛んに動いて珍型妙型色々あつて、この人の短所がむしろこの場の人形としては思ひがけない長所になつたやうで怪我の功名とでも云ふか、榮三とこの人の持味の對照が一々比較されて興味深いものがあつた。大隅は瀬尾を卒業して實盛がこの人としては勝負所である。その實盛は遠がに次の古靱にバトンを渡してしまふと兩者の優劣が實にはつきりと分つてしまつて、今更ら藝と云ふものゝ實力の差がまさしくと感ぜられる。古靱の實盛は私に今日迄餘り狎染がないので尤も興深きいと云ふだけで、それ以上委しい批評は遠慮しておくが、「我子を慕ふ魂魄も……のあたり作意の馬鹿々々しさを超越して鬼氣迫るやうな感があつた。

作意と云へば三段目の瀬尾の氣持が、四段目の檢校の氣持にダブツつてゐるやうな所が直ぐ考へ合される。

古靱としては太郎吉に對する瀬尾の荒々しい愛情と、小まんに對する小よしのやさしい愛情との對比的な交錯に重點を

おいたのは當然で、特に太郎吉の童心を表現する技巧にいつも乍らの牙えがあつて結構であつた。

物語りを二重の上だけでやるのは不思議でないが、詮議を二重でやるのは人形獨特の行き方で、これと後段馬上になつてから、かき繩で仁惣太を引つけて首をかききる所と共に、人形らしい表現法が面白かつた。

壺坂は勝平が喜左衛門になつた改名披露狂言で、伊達のもの、後に勝芳が勝太郎になり綱延が錦糸と名を改めた。

以上を本興行として、別に日曜祭日の晝の間に限り壺坂と出陣と二十四孝の三つを練習題目として、太夫三味線人形の若手がそれ／＼腕比べを見せてゐる。何れ折があらばこれにも言及したいが、單なる人氣取りや申し譯の看板にせず、いつ迄もこれを行つてほしいと云ふ事を熱望しておく。

## 批評と活字

中山泰昌

何故だか、批評といふことを蛇蝎の如く嫌ひたがる癖のある藝界に於て、殆ど批評を生命とする「素絃淨曲研究會」が五十回の祝賀會を舉行したといふことは、正に奇蹟と云つて然るべきであるが、之は一向田蝶花形先生の力である。

蝶花形先生の「半シテ論」は、熱心な賛成者があり、絶對の支持者もあると同時に、相當耳を傾くべき有力の反對意見もあるから、もう先生は自ら之に討論終結を與へらるゝか、乃至は妥協に出らるゝかと思ふと、一向そんな様子はなくて益々鼻息が荒い。此のネバリとフンバリとが研究會を此處まで持つて來られた力であらう。先生の語る義太夫は、正直一向「うまい」とは思はぬが、何處か其の義大夫らしくない所に面白味がある。先生のは義太夫を提げて見臺の前に立たれるどころか、義太夫を横に咬へて振つて振り廻される、この力で研究會を振つて振り廻して來られたのである。先生は竹柏園の歌人である。併し先生の歌は凡そ其の一園と縁の遠い例へば何々調査團何資源調査報告書といつたやうな「歌」さ

へあるが、それで以て何處かに捨てがたい生新味がある。この新味を加ふる力、それが研究會にも注入されて來て、今日まで飽かず腐らずに來たのであらう。

この祝賀會の席上で、圖らずも「批評」問題に花が咲き、祝辭が思はぬ論戰となつて應酬互に譲らずといつた賑かな光景を呈したのは、さすがに批評を生命の素絃研究會なればこそと、頗る愉快に感ぜられた次第である。

ところで其の論戰は、星野氏が「批評をやることは結構で之は忌憚なくやつて好いが、それを活字にすることは已めて貰ひたい」といふ要望から出發したのであつた。ところが、蝶花形先生は、當日の主賓であり、實質上の司會者であり、進行係であり、整理係であるといつた形で、一向席暖まらず其の間の應酬であるから、雙方脱線した點もあつたが、そこへ本山狄舟先生が、「義太夫は語るまでは自分のものであるが、語つたらそれは聴者のものであるから、批評は自由である」といふ明斷を下されたのは、正に頂門の一針である。そ

れには論のあらう筈がない。

併し私は、星野氏の提言に對して、一應吟味を加へる必要があることを痛感するものである。

星野氏の提言は條件つきである。「批評は勝手であるが、滅多な事を活字にするのは不可だ」といふ但し書附であることを注意しなければならぬと思ふ。

星野氏の云はれんとするところは、座談會の漫談漫評には無責任の放言もある、研究未熟の漫言もある、見當外れの愚評もある、それも其の場限りの事なら、愚評も放言も一つの研究であるからよいが、之を活字に残されたのでは迷惑千萬だといふ意であつたやうに受取られたが、それも尤も千萬の意見だと思ふ。が、其の時の應酬が數次重ねられた時に、星野氏はもつと突き進んだ點に觸れられ、「關西の某雜誌」の態度に一言言及せられたが、之についても私は星野氏の提言を至當とするものである。

こゝで考へねばならぬことは、「活字」といふものの魅力であり、偉力である。短冊にしたのでは讀めないやうな、どんなまづい歌でも俳句でも、活字にして見るとトヨイと讀めるものとなる。これは活字のもつ魅力でもあり、その押しつける威厳でもある。その上、活字といふやつは、不滅の記録でもある。かるが故に、口では勝手なことを饒舌つても活字で残ると思ふ原稿を書くに當つては、一應襟を正すだけの

大夫に加へた筆誅的酷評の如き、却つて其の誌の權威を疑はれ、筆者並に其の一團の成心を陋とせられ、世間は之を紋下問題にまで絡みつけて、有らでもの腹を探るに至り、却つて同情は翕然として津太夫に集つたが、さういふ逆効果を豫期し得らるゝからと云つて、無責任の暴言漫罵をまで之を批評として許すことは出来ない。斯ういふ人達が、過去の文獻の片言隻語をまで漁つて、それを發見の一大事として見せびらかせ乍ら、鬼の首でも取つたやうに貴重資料として取扱ふのだから笑はせる。それ程、文字として残つたものが大切だといふことが解るなら、自分自身にも深く反省するところあつて然るべきであらう。自己を重んじ、自家の權威を護るところとは、鷲鳥のとやに火をつけたやうに、ガア／＼騒ぎ立てて世間を賑はせるよりも大切なことである。

○ 批評の中で最も唾棄すべきは、自己に何の眼識も力量もなく、唯だ自分の最眞の友人から種を漁つては、友人らしい批評をすることである。中には、友人にも容易には分らぬやうな技術上の事まで書き立てて大手を振つて歩くのさへあるといふ事であるが、それらはまだ稚氣のある方であるが、自分の出入りの部屋から出る中傷的な放送を其の儘取りあげてそれを批評の材料とするに至つては實に沙汰の限りである。相撲記者は、其の部屋々々の最眞が殊に激しいが、それでも

責任を感じざるを得ないのである。それだけ活字といふものに對しては恐怖さへ感するのであるから、星野氏が「滅多な事を活字にだけは残してくれない」といふ要望は無理ならぬことであると思ふ。

この頃私は必要あつて、軍及び政府の發表と、最有力新聞の記事とを資料として或る日記を書いてゐるが、〇〇から倅が、上陸當時の其の新聞を懐しさうに讀み乍ら一何だ、こんな處に激戦があつたなんて、飛んでもない事を書いてらあ。おや／＼〇〇〇〇に戦車隊が突入したつて。こんな信用のある社の特電だつて好い加減のものだなあ」と云つてのを聞いて私は吃驚した。之では資料の撰擇からが必要になつて來るが、中にはそれが出来ない事も多々あつて、嘘を嘘のまゝに信じなければならぬ場合がいくらかも出て來るのである。大言海に、石油は石炭から採るものと書いてあつたり、某氏の「竹本麓太夫」の如きは、其の道の友人からは容易く發見出來る誤謬であらうが、やはり一犬形に吠えて萬犬實を傳へぬとも限らず、文五郎と先代玉藏とが、大正四年一月に文樂座に同時に買はれたといふやうな某書の記事も、やはり活字になると、嘘は嘘のまゝに傳はる。駄も舌に及ばずと、口舌の禍さへ古人は恐れたが、活字の悪戯はもつと激しいのであるから、筆を執るものは千思萬考すべき事であらうと思ふ。

併し、筆は逆効果を奏する場合もある。關西の某雜誌が津

勝負は即座に天下の批判に訴へらるゝから、事は頗る簡單で無邪氣であるが、他の藝道に至つては然らういふ譯に行かぬ。甲是乙非、その間どのやうにでも色はつけられるのであるから、所謂舞文曲筆の餘地が十分にある。その餘地へつけ込んで、柄のないところに柄までつけて、筆劔の暴を自由自在に揮ふのだから、批評さるゝもの、即ち弱い藝人達はみじめなものである。

殊に批評家は「黙殺」といふ暴力さへ揮ふことが出来るのである。一方を掲げて他を黙殺する、それを以て、最眞の部屋への贈物にするといふ手さへあるのだから、實に筆の力、筆先の綾ほど恐ろしいものはない。

尤も斯ういつた批評家が天下に重きを成す譯はないから、うつちやつておいても好いやうなもの、狭い藝界の中ではかなりそれが邪魔になり、害毒となることがある。私は其の弊の事實をも知つてゐる。そしてそれが「活字」といふ化物の力で、後代に残る「記録」となることを考へると、眞に心を寒うせしむるのである。

斯くいろいろ／＼申したからとて、私は批評家の筆を封じようとするのではない。只、ある成心を以てする批評や、樂屋の放送の受賣や、人身攻撃的の批評や、筆權の自由を弄んでの毒舌漫罵、といったものを此の藝界から葬つて了りたいと思ふばかりに、細川氏提言の尻馬に乗つて平生の所感を述べただけであつて、眞に指導性のある批評は、固より多々益々盛んなんらことを望むものである。

# 旅興行氣分

本山 荻舟

十月中旬、家族を連れて展幕歸省の序に、阪地へ立寄つたので、文樂を觀聽する豫定にしてゐたところ、強行旅程と朝寒とに祟られて、着阪途端に風邪發熱の爲、そのまゝ宿舎に休養を餘儀なくされ、折角の機會を逸したのは遺憾だつたが、座席の用意がしてあつたので、家族に親戚を加へ、女ばかりで見せにやつた、その彼等の感想談を傳へるのも、文樂當事者には、何等かの參考にならぬとは限るまい。

彼等は初めての文樂入場だつたから随ツて一層感動したのもあらうが、東京では無論引越し毎に觀聽して、太夫・三味線・人形遣ひ共、舞臺馴染はあるのだが、これを初めて文樂で觀ると――聴くと、まったく初めて本統の人

それから滲み出る好印象の主たるものは人であり、人の心構へであり、設備は寧ろ従であることを見のがしてはならぬ。

東京で接する文樂は、どうも「旅興行」の感じを免れない。當事者並びに演技者が、その心から脱却し得ない爲ではないか。みづから輕んじて、他から重んぜられる氣遣ひはない。民衆藝術として最も古典である文樂が、古格を重んずるのはよいが、因習に囚はれて時代を逸してはいけない。齒に衣を被せずにいふなら、阪地の觀聽者を偏重して、東京の客を輕んずる――若しくは甘く見るのがいけないといふのである。

既に歌舞伎の俳優は、かなり早くから東京の觀客を重んじ、東京に於ける聲價に、最も大きな關心を持つてゐる。それを持たないものは漸次落伍し、若しくは落伍しつつある。反對に大阪の觀客を、甘しと見る結果が、大阪に於

形淨瑠璃に接した感じがしたと、みんなが異口同音にいふ。こんな話もよく聞くことだが、敢て通がつていふのである、また通がるほどの批評耳目があるのでもなく、ほんの從順な愛好者たるに過ぎない、いはゞ一般入場者の感想であるところに、却つて意義がありはしないかと思ふ。

それには小屋の大きさなり設備なりが、一座の機構としつくり調和してゐるといふことも、大きな原因であることはいふまでもない。しかし單にそれのみではない。イヤそんなことよりもツと大きな原因は、演技者それ／＼の心の置きどころによるのであらう。ところが否定できまい。すべてが渾然融合して、いかにも「本場」であると感じ

ける歌舞伎を、退轉せしめつゝあるのではないか。

文樂はそれと對蹠的であるが、いづれにも偏して眞に發展する氣遣ひのないことは明かだ。屢々いふことだが、既に四十年の昔、御靈の文樂で大切に語つた先代津太夫が、床に現はれるのを後にして、約半数に近い客が立つたのを、この目で確かに見て以來、淨瑠璃に對する大阪人の鑑識に、大きな疑問を抱いて來た筆者である。その後最近に至るまでの文樂の運命が、如何であつたかを顧みるとよい。

(一七・一一・二二)

## 五十義會の試演

内田 三千三

花房氏は春季五十義會に「忠九」を提げて敢闘、西大關を獲得した。が卒直に云ふと、あの「忠九」はお石と戸奈瀨のカハリが演出上混淆して、截然と迫る滋趣に缺けた。其れと「忠九」の持つ壯重な風韻が浸透せず、花房氏にしては珍らしく意氣張り通して、淨曲至深の人物「忠九」と血みどるに取組む闘志のみが、浮彫になつて深遠雄妙な此の曲の持つ風味を芳出させるまでには「藝の磨き」と「演出の練り」が足りなかつた。

今度の「忠九」は前回不振だつた戸奈瀨とお石のヤリトリと風格のある至難なマクラを省いて「親の登目……」から、本藏の突込みを附けて演出した。一番上出來を夢想しなかつた本藏が意外に面白く、鮮烈な香りと、雄靱な腹が利いて好演だつた。ドス一方で締め付けて行く單調な演出でなく、稍油つこい感ばあつても、雄勁に語り棄てる藝韻と巧味のある重量感が、適妙に交錯して生き／＼と本藏の人間性を良描する。

殊に「ヤアざわ／＼と……に腹が籠り「見苦しい」……を語り棄てる呼吸……」「馬鹿つくすな……」箇處が鮮妙で佳い、小浪は情韻を籠めて素直に密描した。演出の基底に一貫性を持つ純情味が香りのある藝韻を妙潔さす。「必ず／＼」の二度目の「必ず」が鮮儻美妙である。

お石は細心を籠めて語るが、滲じみ出る巧味がモウ一歩だ。特に眼目の「鳥類でさへ……」が餘りに意氣込んで、突込み過ぎる爲、餘韻が消え、藝よりも氣魄が先行した。研究して藝心一致の妙境へ到達して欲しい。

外にあるを氏の「寺子屋」が小ぢんまり纏り過ぎる難があるが、灰盡い餘情があつて、疎慢な大仰さが無く、サラリと運ぶ。小さい箱庭を見るやうな藝に雄放な滋趣が出て來れば藝質の良い人だ。

盛鶴氏の「帯屋」は品はないが、詞が巧く、達者に人物感情を表現する。「婆あ」が巧く、これがしめつけられるやうな長右衛門の苦惱を克く浮彫にする。淨瑠璃に「枯れた藝韻」と「ふくらみ」が出て來れば愉しめる人だ。

# 古靱太夫に望む

安部 豊

富取さん、淨るり界發展のため毎々のお骨折を感謝いたします。私どもは御誌により教へられることの多いのを大いに徳としてゐます。尙一層御盡力を願上ます。

さて文樂座人形淨るりは、近來東上のたびごと大人りを占めて歸阪するやうですが、洵に御同慶に存じます。然し此大入りも、中味がよくて客を引付けたものとは云へないでせう。つまり世の中の景氣がいゝところから、そして久しぶりの文樂といふところから、老いも若きも出かけることになるものと云へるでせう。座員たちは斯うした眞實を承知して更に自重されたいことを私は熱望するものであります。殊に若い太夫さん方にこれを望みます。およそ今日ほど若い太夫さん方は振はな

がりの語り方が近年著く増してきたやうですから、そんな點から、出直すことです。

「酒屋」などを聴いてもすぐにそれが判るではありませんか。勝手な語り方をするから人形とも意氣が合はず、三味線ともチグハグになつて、眞に堪能するに足るものもないのは心細いことではありませんか。古靱太夫は、兎に角責任を以て、後繼者の養成に留意するのを最も急務とすべきでありませう。

人形の方にも亦後繼者養成は大切なことでありますが、これは昨今の太夫陣ほど行詰つてゐないから、若い者たちは榮三、文五郎等の藝を吟味して、今のうちに取入れておくことです。しかし如何に榮三の藝でも「堀川」の母とお俊との大切なところで、興次郎が梅干をしやぶつて飯を喰ふあんな他の藝の邪魔をする邪道は眞似しないこと。當人たちは「昔の人がやつた型です」

い、そして藝のうまくない不況時代は嘗てないでせう。あまりに甚しいことと思はれます。要は勉強が足りない、血みどろの眞剣さに缺けてゐるのだと考へられます。マア太夫連名を一瞥してごらん下さい。古靱太夫以外に、確りしたものを誰が語つて聴かせ得ますか。全く太夫陣の寂寥さを痛感するではありませんか。

そこで私は常に思ひ、書きもしましたが、古靱太夫が更に健康でゐて、そして樽下といふ絶大な責任下に於て、若い太夫たちを組織的に鞭撻指導し、思切つて其陣營の立て直しに邁進して欲しいのです。誰の門下であらうとそんなことは今日云ふべき場合でない。厳しく監督して、まづ勝手自まゝな語り方を許さぬこと。未熟な者の獨りよ

と平然としてゐますが、若い人たちはこんなしだらなやり方は斷然やめて眞にその人物の心の相を表現することに力めて欲しいものです。

文樂座の東京に於ける興行が五日替りになつたことは私共の理想に近寄つて結構ですが、徐々に七日替り、十日替りといふ風になり、太夫たちに落つて充分語らせるやうな期間を與へて欲しいものです。三日や五日替りでは漸く固まらうとするところで打切られるのだから氣の毒です。人形の方でも困るでせう。どうぞ文樂陣營の榮えるやうお骨折願ひます。

## 千晴氏の「忠四」

素支淨曲研究会に於ける、緒方千晴氏の「忠四」は茫洋とした裸に「雄渾な氣魄」と「非凡な藝力」を具備する近來の秀演であつた。

「忠四」の生命は云ふまでもなく「嚴肅な沈愁」にある、千晴氏の此の一段は、着古たる鎧を持つ壯重さが、深淵に完出したのが「重厚な滋味」と「雄大な鋭美」さが迫る。特に、音遣ひが佳良で「後に續いて斧九太夫」や申し上ぐる「顔世御前」で、寸瞬人物をクツキリと髣髴させるのは豊かな才幹だ。最初の「花籠」はゆつたりと從客追らず、好描するが「生ける人こそ花紅葉」に灰色の沈愁の中に漂ふ優雅な色氣が乏しのと「お道理でないかいの」の切愁がもう少し秀密でありたい。

郷右衛門は「切腹を願はるるか」……の詰寄りと「心外面にあらはせり」が鮮良である。

九太夫はキビ／＼と突込んで語る前半、「沈鬱な暗愁」に閉ざされた扇ヶ谷の世界で、九太夫のみが「老獪な明るさ」を漂はす演出意圖が面白い。九太夫表現の一種「悪の陽性」さか對進的に「判官の悲劇」を鮮妙に浮彫にし、この曲の深愁を、「深美」に浸透させるからである。

「輕くて流罪」の云ひ廻しや「正月詞」の邊りがいい味だが、吉右衛門の九太夫に似た藝感で、キツパリしてゐるが、枯淡な熟韻は淡い、大星は氣魄雄烈、鋭妙な腹があつて冴える。

「委細承知仕る」の雄深な浄藩と「由良之助にじり寄り」から「打守り」へのかかる痛魂が強靱鋭美で、津太夫の藝境と追憶させる。

要約すれば千晴氏の「忠四」演出法は全體感としては、大隅太夫を聯想させる「おほらかな古味」と「雄大な滋趣」が溢れる。只氏は發洩たる動的表現に長する爲め「靜的な判官」は柄を殺して演出する。望蜀には「静澄は深淵」が出れば完璧だ。

素義界の偉材、千晴氏が、敏智津々たる「靜的表現」の世界を克服し、靜動兩面を把握して靜の「美」と「深」さへ倒達する日を待望する。

新潟第一劇場に於ける

正義座の盛況

隨行記 公孫樹生

向島の竹翠會が改組されて島うつぶ氏を主宰とし、山田義昇、乾桔梗、黒川叶、高光吳光、京極辰和加、太田共樂氏等が幹事となり、乾小桔梗、山川金昇、松本千鳥、小森叶昇、佐藤平之助、酒井宇都々、島春子、芝小柳、未廣花子などの諸氏向島素義團一丸となつて精進してゐる墨聲會は今夏、うつぶ義昇、辰和加、桔梗氏の有志に依つて正義座を組織し、越後新發田、水原等へ、太夫名を名乗つて遠征を企て頗る好評を博し、一日新潟の愛義家伊野宮京香さんを訪づれて清遊したのが縁と

なつて、同氏並びに石黒氏を始め花柳界の應援で十月七、八の兩日新潟第一劇場へ華々しく乗込んだ。

新潟には北陸線で屈指の劇場とされてゐた新潟劇場が最近東寶が買収をして映畫館となつてしまつたので（市の人々は非常に残念に思つてゐる）この第一劇場は島の昆比羅神社に隣りて同市唯一の劇場となつたのである。

一行の宿は劇場に近い第一旅館で、島氏夫妻並びに愛娘若夫妻は五日に、他の人々は開場前日の六日朝の急行で上野を立ち、三味線の豊澤和孝、鶴澤

龜造の兩師はその日の夜行で一同が宿に落ち合つたのである。

新潟縣には猿左衛門が以前から新津あたりで家を持って縣下各地へ出張稽古をしてゐる。小さいな町の花柳界なども同師を招いて、一ヶ月位づゝさわりの稽古をするらしい。吉田町へ行つた時に僕の話が出て、今度僕の來た時には是非逢ひたいから電報で知らせてくれと言つてゐたさうであるが、今年などは六七回も越後へ行つた僕は、まだその機会がなくて一度も逢はない。

古い話であるが、長岡市には十一屋（野澤甚高田市には野澤某、地藏堂町には豊竹巴松など、その他各町に義太夫の稽古所があり、野澤謙左衛門、竹本播磨の兩師も越後出身の師匠で、事程左様に越後は義太夫の盛んな處であつた。今も變らず何處の町でも相當義太夫熱が勃興してゐる。

さて愈々初日の七日である。劇場には竹本うつぶ太夫、竹本國太夫、竹本

八雲太夫、豊竹益太夫の織りが數本立てられ、帝都有名太夫來演と書き出された前飾りも賑々しく、定刻の五時半前より押しかけた聴客に木戸番は画面喰ひの態で、序席春榮さんの鳴門の開いた時には客のつツかける眞盛りで、七時には既に満員の有様、此分では二日目は大變だよ、木戸締切かな、など、樂屋では大恐慌。

鳴門（春榮）陣屋（國太夫）大文字屋（八雲太夫）合邦（益太夫）佐太村（うつぶ太夫）絃（和孝、龜造）

とだん／＼語り進んで大切の野崎村總掛合の開いたのが九時十五分終演まで一人も立たず、しかも大文字屋、佐太村など地方には凡そ向きさうもないものをとおとなしく聽いて、手の打ち處まで合點の行つたもの、それに若い聴き手も多いので、太夫諸老、いや諸賢は嬉れしくなつてその緊張振りは一としほであつた。かくて芽出度初日は終つた。宿へは伊野宮さんや芳の井の喜美

子緒が訪ねて賑かに夜を徹した。

翌る朝は一と風呂浴びて良い氣持ちで朝食をすますと間もなく今晚の大切の掛合堀川の弾き合せが始つた。八雲さんは喉をいためたので出ない聲で、先づ與次郎をつとめた後で喉を焼きに醫師の許へと出かけた。

此朝偶然宿へ訪ねられた市川の伊藤紅二氏（本誌の寄稿家）と堀川の弾き合せ最中僕は外出して、氏の友人勸業銀行の洲崎俊男氏に紹介され、三人で僕の知己浦井君が經營してゐる中央食堂で晝食を取て佐渡へ渡る伊藤氏を船場へ送つ處、折悪しく此日は欠航であつて氏は止むなく新潟で一泊する事になり、開演近くまで氏の知人合同バスの支配入高橋氏や各方面の有力者に紹介をして僕を引きまはされたが、お蔭で得る處甚大であつた。

夕刻劇場へ駈けつけると前夜樂屋で話した通りの聴客で木戸口は大混雑、思はぬフリの客が大牛を締めるといふ

盛況で、間もなく春榮さんの壺坂の幕があがつた。

壺坂（春榮）本下（國太夫）儀作（益太夫）沼津（八雲太夫）忠四（うつぶ太夫）大切堀川（與次郎、八雲太夫。お俊、うつぶ太夫。傳兵衛、國太夫、母、益太夫。お鶴、春榮）絃（和孝、龜造）満員の客に交つて聽いてゐると「矢つ張り違ふねい」「うまいねい」「あゝよかつた／＼」といふ嘆聲が一段毎に方々から洩れて来る。

大切の堀川となつて春榮さんのお鶴がみんなさらつて引込んだかと思ふ後で、心配をした八雲さんスツカリ喉が立てなほつて與次郎も無事上々の出來母親が又上出來、お俊も傳兵衛も申分なく眼をつむつて聴き入ると、一人で語つてゐるかの如く意氣が合つてゐる眼をあいて前後左右を見渡すと聴き手は十二分に堪能をして満場大喝采、十時二日目の幕は閉じられた。

# 大阪文樂座人形淨瑠璃

十二月初日廿八日迄

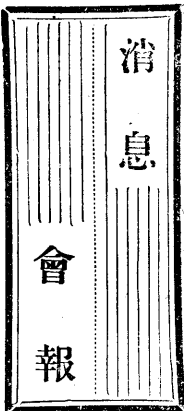
## 新橋演舞場

大阪文樂座人形淨瑠璃太夫、三味線、人形全員引越興行の新橋演舞場は連日超満員、十六日より四回替り外題として珍らしく菅原の通しが上演中であるが、四五回外題は左の通り。

### 第四回 (十六日より廿一日迄)

菅原傳授手習鑑 道行館賣 梅王丸 (雛太夫 刈屋娘(宮太夫、越名太夫)時世君(津磨太夫、司太夫)おふみ(呂賀太夫)おもん(宮太夫、越名太夫)ツレ(松島太夫)友衛門、勝芳改メ勝太郎、綱延改メ錦系、吉季、一郎右衛門、清廣、團作、團伊三。筆法傳授。住太夫、喜代助改メ吉三郎、築地。相生太夫、吉五郎)(呂太夫、仙糸)杖折清二郎)後(織太夫、觀西翁)

此日八雲氏の喉を安じて益太夫氏の口上があつたが、後で「あんなに聲が出るなら口上。要はなかつた」と國太夫さんがいふと「さうだ、益さん口上料を ひなさい」とうつぼ氏がいふ。宿は伊野宮さん喜美子さんなど相變らず見えて前夜にまさる大賑ひ、僕は終演後浦井君に招かれて一時近く宿へ歸る途中前方から大聲で話し且つ笑ひ夜更けの街をひびかせて来る賑かな女連れがあつたが、近づくと伊野宮さんなどが一座の噂をしておのり、摺れ違ひさま、「やアお歸りですか」と聲を掛けると先方はびつくり「オヤツ、まア悪い噂をしたのでなくてよかつたこと」と大笑ひ。



### 九段連中

#### 義太夫大會

#### 濱野若狸

開會以來自肅して非公開を續けて來た九段連中は今度群馬縣中之條町の有志の勸請に依り、出征遺家族並に産業戰士の慰安を目的として十月十一日の午後五時から同町の朝日劇場に於て左記の番組により公演會を催した處、何分慰安に乏しい土地ではあり且つ義太夫に對して理解の深い土地の事として、大した宣傳もしないに拘らず開場前から續々聴衆がつめかけ、中には二里三里も先から來ると云ふ有様で、千人以上も收容出来る小屋が忽ち満員になり

入り切れぬ聴衆が三、四百はあると云ふ盛況であつた。何分達者な連中の事として出來榮も上々であつたが、特に大切の野崎村の掛合は三挺の連弾きに綺麗處を並べたので満場われるばかりの大喝采であつた。

鈴ヶ森(徳次)二つ玉(磯泉、若狸)二十四孝(金子)瀧の段(若狸)千代萩(らく子)安達(磯泉)柳(菊枝)鳴戸(さと子)堀川(岡)宿屋(竹本中和)大切掛合野崎村(絃鶴澤才綱)ツレ引ふく子、菊枝、さと子、きん子)

### 厚木の盛況

#### 田中湖月

芳墨拜見仕候仰せの通り自分主催若千代連にて神奈川縣愛甲郡厚木町仲町俱樂部に於て本月卅日午後五時より人形入義太夫開催致候處定刻より超満員の狀態に有之候最も該地方の娯樂としては平素義太夫に興味多く特に驚きたるは十四五歳の小兒が略二割位は見受し

が此等の子供が義太夫を能く聽く事に感心仕候語物は別紙の通りにて午後十一時廿分終了致し候  
太十前(龍昇)同奥(千振)朝顔前(湖月)同奥(義好)辨慶前(美保)同奥(龍水)十種香(菊水)津津前(榮樂)同奥(吾鈴)鳴戸(浪野)以上抽籤順。

### 三好會

#### 森三好

秋季靖國の御遺族を十月十六日目黒雅叙園に招待し、晚餐の後、柳(巴好)太十(知晨)絃(三好)、續いて十種香を三好彈語りにて久々故郷の上京者を慰めた。越えて廿六日は菊川俱樂部に第十四回を了したり。第十五回は十一月廿八日牛込相互俱樂部に開催。日吉(喜三香、三好)寺子屋(津満子、三好)辨慶(美昇、花昇)酒屋(聲鶴、三好)安達(時昇、燕糸)柳(巴好、三好)野崎(梅聲、三好、ツレ、津満子)太十(岡玉、清秀)以、多數の出演者あれ共三味線

四名の御後援を得たる爲幕間少なく、新顔にて聴客悦ばせたり。第十六回は左の如く出演する事に決定せり。壺坂(喜三香、三好)太十前(岡玉、清春)柳(津満子、三好)寺子屋(時昇、燕糸)日吉聲鶴、三好(合邦(花昇、燕糸)本下(巴好、三好)酒屋(梅聲、三好))

### 大森さゝ波會

濃沼 馨

御無沙汰お許し下さいませし、其後御變りもありませんか、先達大井見番で開催の京濱素義聯盟會で奥さんにお逢ひ致しました。昨晩さゞ波會を富士見俱樂部で催はしたので左に番組をお知らせ致します。(十月廿九日)

先代(東光)朝顔さき子(長局(馨)百廣平(末吉)寺子屋(資子)壺坂(春日))

### 旭川より

竹澤龜次郎

通りであるが、大阪より東上した三味線豊澤稻丸の爲め廿九日夜小石川俱樂部にて左記人々に依り一夕の催ほしあり、聴衆の中には吾孫子權、栗原千鶴中道素鶴氏などの顔も見え出演者は大に熱演し前日の並木にもまさるものがあつた。本下(紅司)陣屋(隅斗)大晏寺(和風)合邦(まづ尾)忠九(信濃)絃(稻丸)

▽十喜和會 十月廿八日小石川俱樂部に開催。太十(淡路)鈴ヶ森(彌生)新口(紫蝶)下總屋(越巴)忠九(義昇)一廿九日交正俱樂部一安達(素鳳)鮎屋(桔梗)紙治あるを先代(玉鳳)重の井(平茶)合邦(山生)なほ新潟より上京中の伊野宮京香さんの爲め十一月四日夜相互俱樂部にて左記有志を以て十喜和會を開催。合邦(京香)安達(淡路)太十(玉鳳)十種香(紫蝶)陣屋(素鳳)忠九(平茶)以上絃(廣助)當夜は十月上旬新潟へ遠征して伊野宮氏の應援に依り頗る盛況を極めた關係もあり、島うつが

前便の通り十月十一日當地國民劇場も華々しく開演致し、毎日大入満員の盛況を續けてゐます。第一回は江戸川蘭子外同封のプロの通りであります。なほ同封の通り旭川素義連中様より出演を依頼されまして、昨年十一月にもやりましたので今回も劇場主の許可を得て二日間平間會館に出演しましたが入場が出来ず歸つた人もあり、満員木戸締切非常な盛會でありました。當地御連中の上々の出来は帝都御連中様にも負けぬ聲節にて實に驚きました。

秋季義太夫大會(會主豊澤國廣、主催國廣會)十月廿一、廿二日午後三時より平間會館に於て開催。西島素女、豊澤千代壽、大串好糸三師應援。

初日一八陣(梅枝、國若)帶屋(旭昇國若)陣屋(國志、國若)朝顔(好糸彈語)太十(清玉、千代壽)安達(國一、國若)揚屋(好喜久、好糸)新口(双葉、千代壽)先代(呂好、素女)赤垣(貴鳳、素女)又助(越登、國廣)寺子屋(錦山、素

女)大切、竹澤龍造一座身振劇入、鳴門(壽樂、國若)……二日目一玉三(老昇、國廣)先代(錦、千代壽)瀧(吞喜、國若)寺子屋(常樂、素女)陣屋(松月、國若)鳴門(月江、千代壽)蝶八(廣昇、國廣)聚樂町(國春、國廣)陣屋(双葉、素女)酒屋(勇笑、國若)忠六(春月、國若)赤垣(重三改廣鳳、千代壽)大切、竹澤一座身振劇入新口(文覺、國三、國若)

▽淨曲翼會 並木俱樂部を本城として毎月開催の翼會は十、十一月都合に依り休會し、十月廿六日午後六時より下谷區谷中妙情寺にて出征遺家族慰安義太夫會を開催。松王(伯獲)堀川(鶴司)壺坂(三由)酒屋(山門)廿四孝狐迄火(大嘉津)絃(猿藏、ツレ、猿三郎、琴、松四郎)

▽稻丸後援會 十月廿六日より三日間並木俱樂部で開催の大阪、京都、東京、岡山、八幡聯合大會は前號既載の

山田義昇、乾桔梗、京極辰和加(益太夫)の四氏も來聴

▽淨曲長生會 第五回を十月卅日正午より松坂屋ホールに開催。太十(乃菊綾之助)辰橋(山生、鹿重)壺坂(以與子良造)鮎屋(正鳳、道之助)鳴戸(佳津子綾之助)酒屋(六花、清一)安達(愛水、綾之助)野崎(喜鳳、道之助)第六回は十一月廿五日正午より同ホールに於て開催。

▽むつみ會 和孝運の「むつみ會」は例により小田原美濃政樓上にて十一月四、五兩夜銃後慰安義太夫會を開催(四日)一太十(小田原、光仙)瀧(雅樂)柳(竹米)佐太村(三幸)寺子屋(義昌)五日(柳(峰夫)合邦(光仙)野崎(竹米)紙治(雅樂)城木屋(玉華)太十(義昌)絃(和孝、阿生駒))

▽高橋東好氏祝賀會 高橋東好氏は今秋五十義會にて昇點一等入賞の榮譽を得たので十二月九日午後三時より並木俱樂部に於てこれが祝賀義太夫會

を開催。

▽中老會 中老會々員諸氏は十一月十日九段「圓六」にて晚餐會を開き、一月十五、十六日並木俱樂部で新年顔合せを兼ね義太夫會を開催する事を議決した。尙ほ今回より桑原美峰氏が新加入した。

▽平市「竹水會」 鶴澤蟻鳳師の出張教授に依り會員諸氏の練磨上達はいちよるしきものがあり、十一月廿二、廿三日午後六時より同市公會堂日本間にて温習大會を催はした(初日)一辨慶(秀鳳)鈴ヶ森(春美)先代(小多ん)寺子屋(夏井)太十(登美乃)朝顔(ひさ)玉三(錦祥)壺坂(榮笑)一(二日目)一辨慶(秀鳳)十種香(蘇鳳)日吉(栴美)松王(錦清)湊町(榮笑)沼津(錦祥)柳(小多ん)安達(夏井)野崎(ひさ)絃(蟻鳳、富勇、ひさこ、春美、栴美)

▽豊澤團秀等援會 岡田氏主催の下にその第一回として十月廿八日夜相互俱樂部に開催 蝶花形、子太郎、三五

堀井、かなめ、淡路、絃醉、津彌太夫氏等出演、なほ次回は來春六月中旬、麴町山の茶屋にて開催の豫定。

▽女義若女會 會場東橋亭(第五十四回)十月十五日)先代(津賀重、素一)

太十(素八、播磨一)新口(素次、清三)葛の葉(小津賀、紋致)朝顔(素廣、駒登久)安達(綾千代、猿玉)同五十五回十一月一日)柳(津賀重)玉三(素次、清三)壺坂(素廣、駒登久)寺子屋(猿春三生)合邦(素八、巴住)堀川(素昇、猿玉)(第五十六回十一月十五日)鈴ヶ

森(津賀重、素子)鳴戸(素八、巴住)太十(素廣、駒登久)毛谷村(佳仙、巴住)朝顔(素次、清三)鮎屋(重之助、勝八)▽古曲發表會 義太夫古曲發表會は來春四月二日並木俱樂部に決定、古曲發表として豊澤團平作曲になる加古千賀女作の「彌陀本願三信記道行三都三自慢迄」上演する事になつた

▽駒登連の房州行 駒登太夫連の玄綠、金壽、瓢登、壽昇、登昇、松玉

氏等は十一月七、八兩日房州天津の天津館にて出征遺家族慰安の義太夫會を開催。

▽新作「みのりの秋」十一月廿七日正午より日本橋俱樂部で催はされた花園歌子新作舞踊發表會にて豊澤芳太郎構成作曲、義太夫三絃主奏舞踊「みのり秋」が上演され、黎明、旭日、ラジオ體操、種蒔、收獲、そして豊年をたゞへるまで、扇之助、美之助の三絃にて太夫なしで三絃のみの舞踊は初めてである。

▽豊竹猿司追善會 十月廿九日午後一時より茅場町官松にて豊竹猿司三回忌追善義太夫が催はされ、出演者多数、頗る盛況を極めたが、序に十種香の掛合(八重垣姫、住若。濡衣、素昇。勝頼、土佐廣。謙信、猿春。絃、猿玉)大切には太十の掛合(光秀、猿玉。重次郎、猿幸。初菊、猿春。操、綱助。さつき、津賀昇。久吉、三生。操、土佐廣、素昇、染登)があつた。

# 太棹社彙報

## 梅鉢會秋季大會

淨曲梅鉢會の秋季大會は十月廿五日午前十一時より並木俱樂部に開催。

沼津(平作、桔梗、重兵衛、蝶花。およね、叶。安兵衛、池添、吳光。龜造、ツレ、扇之助)柳(久松、新造)太十(都平、都大夫)岸姫(喜らく、勝助)油屋(都雀、巴丈)陣屋(吳光、新造)新口(都竹、都大夫)寺子屋(里芳、勝助)

### 素玄淨曲 研究會 十回祝賀會

岡田蝶花形氏主宰の素玄淨曲研究會は十三年九月卅日第一徵兵保險の講堂に於て妙心寺(蝶花形、良造)山名屋(其甫、猿三郎)合邦(巖太夫、猿藏)を以

本欄は大會又は新生の會を報導致します。開催前月に詳報したものは開催後の記事を略します。特種の催はしの外前書きを略します。番組御送附なきものは記載洩れとなりませう。御諒承を乞ふ。掲載順不同。(太 棹 社)

志渡寺(喜城、猿喜知)蝶八(彌聲、扇之助)合邦(義昇、龜造)矢口(叶、扇之助)太十(豊國、紀代松)引窓(うつろ、龜造)忠六(蝶花、勝助)紙治(桔梗、龜造)太十(扇華、扇之助)新口(雅樂、勝助)大切(權太、うつろ)彌左衛門(義昇。お里、叶。母、桔梗。惟盛、蝶花。梶原、吳光。猿藏)

て第一回を開催し、爾來毎月一回開催

## 淨曲協會の發展と新役員

して今日に及び第五十回を重ねたので素玄會維持會幹事飛石かなめ、川口子太郎の主催にて十月廿九日午後五時より新橋驛前藏前工業會館にて祝賀會を兼ね豊竹團司を聴く會が催はされ、出席七十餘名といふ盛會を極めた。開會と同時に食卓につき高橋十三三氏の開會の辭、來賓の祝辭、岡田氏の謝辭等に次いで星野桔梗氏と岡田氏の間には批評を活字にすることの善惡に就き相當激論が交はされ、本山荻舟氏が仲に入るなど、流石研究會らしい風景を展開八時半より豊竹團司は小佐の絃で「河庄」を語り、十時近く井上素鳳氏の閉會の辭に依つて芽出度散會した。



大日本淨曲協會の改組は前號にも既報した通りであるが、愈々左記新役員の類振れも内定し、柳原伯を會長に理事長として齋藤金太郎氏が就任し、長年に亘る氏の理想たりし淨瑠璃界の廓清を實行すべき機に到達したので、齋藤氏は淨曲新報第九號にその抱負を述べ（轉載を略す）協會の事業としてこゝに齋藤氏の理想が具體化する事になつた。協會創立以來これといふ仕事もなくその不評は屢々耳にしたことであつたが、新理事長齋藤金太郎氏の信念と抱負に依つて、淨曲の眞體たる大犧牲的精神を大衆に鼓吹する事の目的完遂が期待されるに立つた。今や大東亞建設の時、協會の斯の飛躍發展は斯界の爲め祝福に堪えぬ次第である。

### 内定した新役員

理事、會長（伯爵柳原義光）理事長（齋藤金太郎）理事（岡喜七郎、片山鬼作、木村榮三郎、松岡清次郎）監事（子

爵植村家治、松崎實）の諸氏。なほ前會長理事三室戸子爵は常任顧問、前理

事櫻井兵五郎、青木精一、倉元要一氏は顧問に内定。

## 高山 兩家祝賀義太夫會

高山太一氏（令息雅司氏（三十歳）は阿部吉之助（雅號）氏長女和子さん（十歳）と婚約整へ、千秋康氏の媒酌にて十一月三日の佳節を卜して上野精養軒に於て芽出度華燭の典を擧げ、席上兩家とも別懇なる中島彌團次氏が來賓を代表して祝辭を述べ頗る盛會を極めたが、素義界の知友より受けしお祝ひに對する謝意として兩家は同じく十二日午後一時半より小石川俱樂部で出演者左記の通り賑々しく披露義太夫會を

催はした。因みに新郎は明大藥學專門科出身にて、新婦は本年三月京華高女を優秀の成實を以て卒業。當日の番組左の通り。  
橋辨慶（播磨一、巴雪） 太十（巴雪連掛合）野崎（とんぼ）山名屋（いくま）堀川（一義）以上絃（播磨一）毛谷村（梅聲）酒屋（勝美）日吉（喜光）御殿（八重秀）十種香（喜遊）太十（阿部一）壺坂（高山和子）以上絃（巴雪）大切 寺子屋（津彌太夫、巴雪）

## 黒田人形淨瑠璃の夕

著名なるものである。猶兩夜の出しものは次の如く長野親觀會員の出演で、兩夜とも千餘名立錐の餘地なき盛況で聽觀衆に非常な感銘を興へた。  
鳴門前（丸締）同奥（錦）朝顔前（清香）同奥（五聲）壺坂（竹童）辨上前（錦）同奥（丸締）本下（和國、尺八、竹童）絃（團

竹本彌團太夫は今回路太夫を襲名し東京因會の應援にて同會太夫總出演の外大阪より竹本重太夫、豊澤廣助兩師も應援出演の下に十二月十八日午後二時より日本橋俱樂部に於て華々しくその披露大會を催はす事となつた。入場料壹圓五十錢、税六十錢  
第一部（午後二時より）岩戸神樂（朝見太夫、卯太夫、駒登太夫、巴太夫）絃（芳太郎、屬之助、美之助、絃内、松市郎、和孝）妙心寺（津彌太夫、絃内）布四（駒登太夫、屬之助）并子（殿母太夫、龜造）新口（都太夫、新造）日吉（重太夫、廣助）

## 竹本素女會

大日本婦人會長野支部では軍人援護強化期間の行事として十月十日、十一日の兩夜市内權堂町相生座で出征遺家族並に傷痍軍人慰安の人形淨瑠璃義太夫の夕を催した、人形は同縣下伊那郡上郷村に古來から傳はる所謂黒田人形で明治の中頃河竹繁敏氏によつて東都にも紹介され、武州秩父人形などと共に

著名なるものである。猶兩夜の出しものは次の如く長野親觀會員の出演で、兩夜とも千餘名立錐の餘地なき盛況で聽觀衆に非常な感銘を興へた。  
鳴門前（丸締）同奥（錦）朝顔前（清香）同奥（五聲）壺坂（竹童）辨上前（錦）同奥（丸締）本下（和國、尺八、竹童）絃（團

竹本彌團太夫は今回路太夫を襲名し東京因會の應援にて同會太夫總出演の外大阪より竹本重太夫、豊澤廣助兩師も應援出演の下に十二月十八日午後二時より日本橋俱樂部に於て華々しくその披露大會を催はす事となつた。入場料壹圓五十錢、税六十錢  
第一部（午後二時より）岩戸神樂（朝見太夫、卯太夫、駒登太夫、巴太夫）絃（芳太郎、屬之助、美之助、絃内、松市郎、和孝）妙心寺（津彌太夫、絃内）布四（駒登太夫、屬之助）并子（殿母太夫、龜造）新口（都太夫、新造）日吉（重太夫、廣助）

竹本素女の主宰する竹本素女會第廿七回は晝夜二部に分ち十一月廿六日濱町明治座に於て華々しく開催した。  
晝之部（正午より）辨慶（素八、巴住）鰻谷（猿春、三生）中將姫（染登、猿幸）酒屋（素女）大切寺子屋（松王、駒勝八）酒屋（素女）大切寺子屋（松王、駒若、玄蕃、綾作。御喜、津賀重。戸浪若好。千代、綾千代。よだれくり、住

世子。百姓、素八。源藏、彌周。絃（紋教）  
夜之部（午後五時より）鮎屋（昇登、綱助）宿屋（素廣、駒登久）柳（越駒、津賀昇、紙屋（小津賀、紋教）先代（素昇、猿玉）合邦（素女）大切太十（光秀、彌昭十次郎、佳仙。久吉、駒榮。さつき、素次。初菊、文昇。操、住若。絃、清一）

竹本彌團太夫は今回路太夫を襲名し東京因會の應援にて同會太夫總出演の外大阪より竹本重太夫、豊澤廣助兩師も應援出演の下に十二月十八日午後二時より日本橋俱樂部に於て華々しくその披露大會を催はす事となつた。入場料壹圓五十錢、税六十錢  
第一部（午後二時より）岩戸神樂（朝見太夫、卯太夫、駒登太夫、巴太夫）絃（芳太郎、屬之助、美之助、絃内、松市郎、和孝）妙心寺（津彌太夫、絃内）布四（駒登太夫、屬之助）并子（殿母太夫、龜造）新口（都太夫、新造）日吉（重太夫、廣助）

## 竹本彌團太夫 披露義太夫大會 路太夫を襲名

竹本彌團太夫は今回路太夫を襲名し東京因會の應援にて同會太夫總出演の外大阪より竹本重太夫、豊澤廣助兩師も應援出演の下に十二月十八日午後二時より日本橋俱樂部に於て華々しくその披露大會を催はす事となつた。入場料壹圓五十錢、税六十錢  
第一部（午後二時より）岩戸神樂（朝見太夫、卯太夫、駒登太夫、巴太夫）絃（芳太郎、屬之助、美之助、絃内、松市郎、和孝）妙心寺（津彌太夫、絃内）布四（駒登太夫、屬之助）并子（殿母太夫、龜造）新口（都太夫、新造）日吉（重太夫、廣助）

竹本彌團太夫は今回路太夫を襲名し東京因會の應援にて同會太夫總出演の外大阪より竹本重太夫、豊澤廣助兩師も應援出演の下に十二月十八日午後二時より日本橋俱樂部に於て華々しくその披露大會を催はす事となつた。入場料壹圓五十錢、税六十錢  
第一部（午後二時より）岩戸神樂（朝見太夫、卯太夫、駒登太夫、巴太夫）絃（芳太郎、屬之助、美之助、絃内、松市郎、和孝）妙心寺（津彌太夫、絃内）布四（駒登太夫、屬之助）并子（殿母太夫、龜造）新口（都太夫、新造）日吉（重太夫、廣助）

# 因會女子部秋季大會

日本帝國義太夫因會女子部は十二月一日午後一時より日本橋俱樂部に於て左記番組の下に秋季大會を開催。

(第一部) 市若初陣(素女) 酒屋(素八、巴住) 戀十(土佐廣、綱助) 志渡寺(猿春、三生) 中將姫(綾之助、清一) 新口(素次、清三) 鯨屋(團蝶、猿幸) 引窓(昇登、綱助) 先代(彌周、三生) 柳(綾千代、猿玉)

(第二部) 壺坂(光助、清二) 辨慶(素廣、駒登久) 大文字屋、小津賀、紋教(寺子屋) 若好、巴住(鳴門) 小和光、清三(太十) 重之助、勝八(大切) 一力茶屋(由良之助、素昇、重太郎、綾作。喜太夫、佳世子。彌五郎、津賀重。おかる、染登、力彌、駒榮。伴内、住若。九大夫、佳仙。平右衛門、越駒) 絃(前津賀昇、奥、猿幸)

# 大日本素人淨瑠璃會

大阪に於ける大日本素人淨瑠璃會の第十四回は全國よりの出演者多數を以て十一月廿四日より廿八日迄五日間毎日正午より文樂座に開演されたが、同時に第十三回大會の番組も出來、竹本大隅太夫、竹本住太夫、豊澤團友、野澤吉彌、鶴澤清八、伊東柳平、吾孫子

櫓、笹村ふんどの九氏審査の下に東西左の通り發表された。

横綱(利生) 東大關(信濃) 關脇(金聲) 小結(和十) 前頭(義島、貴道、鶴聲、楓江、うろこ、小富士、あしべ、素呂離、華遊、花住、長登、五勢、十九壽) 二段目以下略。

西大關(生樂) 關脇(重司) 小結(タツミ) 前頭(鶴笑、登一、松鳳、榮四、紅司、里昇、光友、きく水、まつ尾、幸遊、一蝶、得谷、住之助) 二段目以下略。

# 文樂人形淨瑠璃の夕

大阪文樂座人形遣ひ吉田文五郎、桐竹紋十郎が嘗て「人形遣列祖供養塔」の建立を達成せしめん爲め、長唄、清元、新内、常盤津、地唄等邦樂諸流及び義太夫と提携し、昭和十四年十一月九段軍人會館にて「文樂淨瑠璃の夕」を開催し、次いで文樂人形遣獎勵會への活動等其計畫を實現し、爾來每秋同館を本城とし開演を續けて來たが、此間幾多の比難を忍んで遂に東京年中行事の一つともなつた程に頗る好成績を挙げ、茲に滿三周年を迎へたのでその記念興行が文樂人形遣獎勵會の主催で

左記番組の通り十一月廿五日より三日間軍人會館に於て催はされた。

(一) 人形説明(桐竹紋十郎)、(二) 紅葉狩(義太夫) 文太夫、津磨太夫、呂賀太夫、友右衛門、吉季其他。(三) 日高川(新内) 文彌、宮太夫、彌枝太夫其

他。(四) 屋島(地唄) 規井子其他。(五) 桐竹紋十郎考案人形身振(義太夫さわり集) 文太夫、津磨太夫、呂賀太夫、吉季、友花其他。お里、房江(七才)、藏場、お染、夏美(十二才) 八重垣姫、美惠(八才) 野崎、お染、昶子(七才)

# 綾千代新興會

竹本綾千代後援會は今回綾千代新興會を組織し、東京藝術協會、綾千代後援會主催の下に「増産戦士慰問の夕」としてその第一回を十一月廿九日午後五時半より左記番組に依り軍人會館に於て催はした。

國民儀禮(司會者)、落語(三橋)、アコーデオン獨奏(富岡豊)、舞踊(松賀緑、滋、喧)、漫談(樂天) 歌謡曲豊、美代子、とよみ) 日本の藝談(金川文樂) 堀川(綾千代、猿玉、ツレ、津賀昇) 大切一力茶屋場(由良之助、重之助。お輕、小津賀。平右衛門、彌周、猿玉)

# 岡本柳光氏 祝賀義太夫會 病氣全快

久しく病氣靜養中休演を續けてゐた岡本柳光氏の全快祝賀義太夫會が十月十九日午後十時より左記多數出演番組の如く

お七、尚子(十一才)。(六) 夢麻(清元) 壽國太夫其他。(七) 酒屋(義太夫) 南部太夫、重造。(八) 連獅子(長唄) 伊四郎其他。人形……(文五郎、紋十郎、政龜、多三郎其他)

賑々しく並木俱樂部に開催した。

橋辨慶(牛若丸、佳世子、辨慶、佳仙) ツレ、佳津子。綾之助、ツレ、綾作、綾廣(光玉) 市若初陣(淺路) 河庄(枝蝶) 太十(喜照) 朝顔(佳津子) 陣屋(一昇) 戻り橋(愛水) 辨慶(呂聲) 吃又(乃菊) 以上綾之助。(太十) 龍昇) 玉三(龍水) 壺坂(美好) 合邦(千年) 赤垣(美保) 柳(菊水) 長局(浪野) 忠六(吾鈴) 寺子屋(湖月) 儀作(樂) 鯨屋(富士登) 以上(若干代連) 紙治(六花、清一) 梅由(儀松、駒花) 合邦(魚遊、小和光) 寺子屋(義昌、和孝) 太十(其角、松四郎) 野崎(喜鳳、道之助) 近八(清、道之助) 布四(文盛、絃平) 伊賀五郎、絃平) 陣屋(巽、絃平) 白石(都竹、都大夫) 安達(都昇、都大夫) ……挨拶(岡本柳光、幹部一同) 大切野崎村(久作、乃菊) お光、光玉 久松淺路。お染、愛水。母、およし、柳光、絃(綾之助、ツレ、佳仙、佳世子、綾作)

# 第二回 蛙聲會



